

飯田松川・西俣川遡行登山（2012/08/03-05）

—御影工業高校山岳部の慰霊碑を訪ねて—

菅克己（HUAC-33）さんが、御影工業高校山岳部の部員とともに、飯田市松川で鉄砲水に巻き込まれ、宿泊していた小屋ごと押し流されて遭難されてから、今年は43年目に当たる。遭難した蜂の巣小屋跡には慰霊碑があり、地元の丸山春雄様がボランティアでその維持管理を続けておられることをインターネットで偶然知った。そこで、命日の8月5日を含む日程で、慰霊碑の清掃と松川・西俣川を遡行して安平路山（2363m）に至る慰霊登山を計画した。このルートは、遭難の翌年、昭和45年の命日に開催された慰霊碑除幕式に参列された増永迪男さんと井上孝郎さんが、式を終えた後に遡ったルートでもある（会報29号：「一年後、飯田松川・木曾須原」増永迪男）。当時のお二人は30歳台半ばで、最も脂がのった年齢と思われるが、今回の遡行登山は、60歳台半ばのかなり疲れが出ている高年登山者の挑戦となった。飯田駅から安平路山に至るルートは、下図に示す大平街道を大平宿まで行き、東沢林道から登って行くのが一般的であるが、遭難事故以前には蜂の巣小屋経由で安平路山に至る登山道があり、菅さんのパーティーはこれを辿る予定であった。このルートは遭難事故以降には廃道となったままである。我々は、蜂の巣小屋を押し流した沢筋を忠実に遡ることにした。



図-1 松川・西俣川の遡行ルート図

1) 日程：2012年8月3日（金）～8月5日（日）

2) メンバー：松川・西俣川の遡行 ⇒ 青景平昌(L)、和田穰二
慰霊碑までの参加 ⇒ 増永迪男、阪田正博

3) 予定コース：

8月3日(金)：JR 飯田駅⇒蜂の巣小屋跡慰霊碑（林道終点）⇒慰霊碑広場でテント泊

8月4日(土)：T.S⇒西俣川遡行⇒安平路山⇒安平路避難小屋（泊）

8月5日(日)：安平路避難小屋⇒摺古木山⇒大平宿⇒JR 飯田駅

4) 山行記録

8月3日(金):晴

12時に和田さんと共に JR 飯田駅に着くと、待ち合わせていた増永さん、阪田さんと一緒に、赤羽目壮人さんにも出迎えられた。赤羽目さんは地元飯田市の信用金庫の支店長をされている方で、件の丸山春雄さんの慰霊碑整備活動をインターネットで紹介された山岳写真家である。今回の慰霊碑の訪問に際しては丸山春雄さんを紹介していただき、慰霊碑の訪問と清掃について事前に連絡をとることができた。丸山さんは飯田市内に在住で、80歳を越えておられ、最近では慰霊碑まで車でゆくのが難しくなってきたと言っておられた。慰霊碑の整備は、飯田市のボランティアの方々の支援で続けておられるそうです。

当時、菅さんのパーティーは飯田駅で仮眠した後、徒歩で松川を遡ったとのこと。我々は、増永車と阪田車に分乗して慰霊碑に向かう。駅前のスーパーで買い物をした後、松川に沿った大平街道を遡る。松川ダムの上流にある市ノ瀬橋を渡って直ぐ右折して林道に入り、「松川入」に至る。松川入は、戦後引揚者が入植した開拓村であったが、菅さんたちを直撃した鉄砲水によって廃村に追いやられたところである。御影工業高校山岳部の慰霊



写真-1 慰霊碑と鎮魂七点鐘



写真-2 蜂の巣小屋跡の慰霊碑

碑は、飯田駅から15km程度遡った林道脇の芝生の広場に、花に囲まれてあった。遭難した7人を偲んで叩く、「鎮魂七点鐘」が併設されている。43年目を迎えようとしているが、丸山さんら飯田市の人々によってきれいに清掃・整備されていた。そこからさらに400m上流の林のなかに、蜂の巣小屋跡があり、ここにも慰霊の碑がひっそりと設けられている。管さんたちが宿泊し、鉄砲水に襲われた森林組合



写真-3 蜂の巣小屋跡の上流の2段砂防ダム

の小屋の跡である。林の間からは、川の流れは見えない。さらに上流には、その後に構築された2段の大型砂防ダムが行く手を阻んでいる。これを迂回して林道はさらに上流に延びているが、ゲートが設けられ、一般車の進入はここまでである。

我々4人は手分けして、この小屋跡の慰霊碑周辺の清掃、草刈りを行なうことにした。作業道具は、阪田さんがKCから運んでくださったものである。増永さんが用意された草花を手向けて冥福を祈った。

宿泊テントは、芝生の慰霊碑広場に張った。すぐ後ろには沢水を取り込んだ水場もあり、また、傍には丸山さんが自費で設置されたトイレもあった。阪田さんは所用で帰宅されたが、残り3名は管さんと一緒に寝ることになった。増永さんからは、菅さんの現役時代のこと、遭難捜索のことなどを昨日のこのように伺うことができた。

8月4日(土):晴

起床(3:30)⇒林道ゲート(5:00)⇒(5:13)壊れた鉄橋(5:45)⇒(5:54)スリット堰堤⇒
⇒(5:59)コンクリート堰堤①⇒(6:17)コンクリート堰堤②⇒(6:25)引き返し点⇒
⇒(7:20)2段砂防ダム⇒(7:58)滝・高巻き⇒(9:22)懸垂下降(9:56)⇒(10:02)ゴルジュ⇒
⇒(11:41)高巻き⇒(12:14)大西の滝・下滝⇒(12:36)高巻き・懸垂下降(13:55)⇒大西の滝・上
滝を巻く(14:39)⇒河原の遡行⇒(16:14)左岸の裏面崩壊箇所⇒(17:11)二股分流箇所⇒
⇒(18:00)二股テントサイト

福井に帰られる増永さんには、2段の砂防ダム手前の林道ゲートまで車で送っていただいた。砂防ダムを避けるように右岸に延びる林道のゲートをすり抜けて暫く行くと、林道法面の草むらに僅かの踏み跡があった。これを辿って砂防ダムを巻くことにする。取付きはけもの道のようにであったが、はじめの急斜面を過ぎると徐々に明確な山道となっていく。しかし、その大部分は草木に隠れており、人が殆ど入っていないことが伺える。そのまま水平に進むと崩れそう

な鉄橋が架かった沢に遭遇した。[写真-4] 沢筋に降りることだけを考えながら進んだので、最初の沢が目的の沢と勘違いしてしまった。鉄橋の下で沢歩きの身支度をして、そのまま遡行を開始した。そこから、さらに上流のスリット式砂防ダムと、コンクリート砂防ダムを二つ越えたところで、遡行している沢が西方向の摺古木山に向かっており、北に向かう目的の沢ではないことに気付いた。そこで一旦、スタート地点の2段の砂防ダムまで引き返すことにする。まずは、遡行を開始した鉄橋を目標に下ったが、不思議なことにその鉄橋を見ることなく下方の砂防ダムに着いてしまった。あの鉄橋はどこにあったのか、狐につままれたようであったが、実は未だによく分からない。西俣川はこの砂防ダムの位置が、丁度扇状地形の要となっており、ここから扇の骨のように沢が広がっている。沢を下るときに、登るとき時とは別の沢筋に紛れ込んでしまったようだ。43年前の遭難事故は、この一杯に広げた扇に降り注いだ大雨が一箇所に集まり、その下にあった小屋を一気に押し流したのであろう。2段の砂防ダムの上流には土砂が溜まって、広い河原が造成されていた。[写真-5]

改めて、2段の砂防ダムから、安平路避難小屋に向かう右俣の沢の遡行を再開した。約2時間のロスであった。程なく、沢はゴルジュを形成して低い滝が現れてくる[写真-6]。簡単に高巻き出来そうなので取っ付くが、上から沢筋を覗くと、難所が連続しているように見えるので、



写真-4 崩壊寸前の鉄橋



写真-5 砂防ダム上流の河原

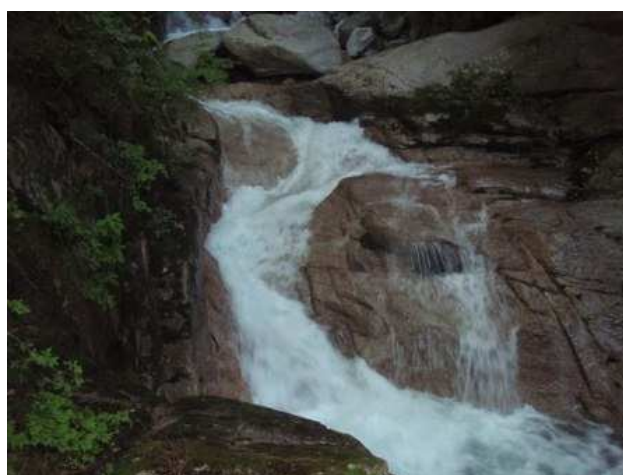


写真-6 勢いのあるゴルジュが現れる

沢筋に下降するのが面倒になる。それでも、行く手を完全に阻まれる場合には、懸垂下降で沢に下降した〔写真-7〕。高巻きの途中、所々で遭遇する赤旗に安堵しつつルートを探りながら進んだ。そのような高巻きと下降を2回程繰り返して、大西ノ滝に出た〔写真-8〕。この滝が大西ノ滝であることは、既往報告の写真でそれを確認した。和田さんが持参した沢筋を色分けした地図とコンパスで現在位置を特定しようとしたが、周りの地形が見えない深い沢に入ると、自分たちの位置が分からなくなってしまう。大西ノ滝はそれが確認できた唯一の明確な導標であった。この下滝は2段となっており、下の滝で90度流れの方向を変えている〔写真-8〕。増永・井上パーティーは、この部分の右岸を高巻いたと記しているが、我々は左岸のガリーを登り返して、上の滝も一気に高巻いてしまった。林の間から垣間見る上の滝も立派な滝である〔写真-9〕。

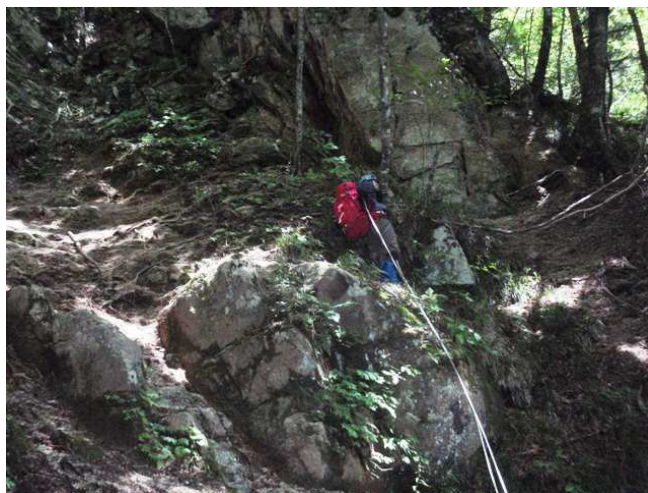


写真-7 懸垂下降で沢に下りる

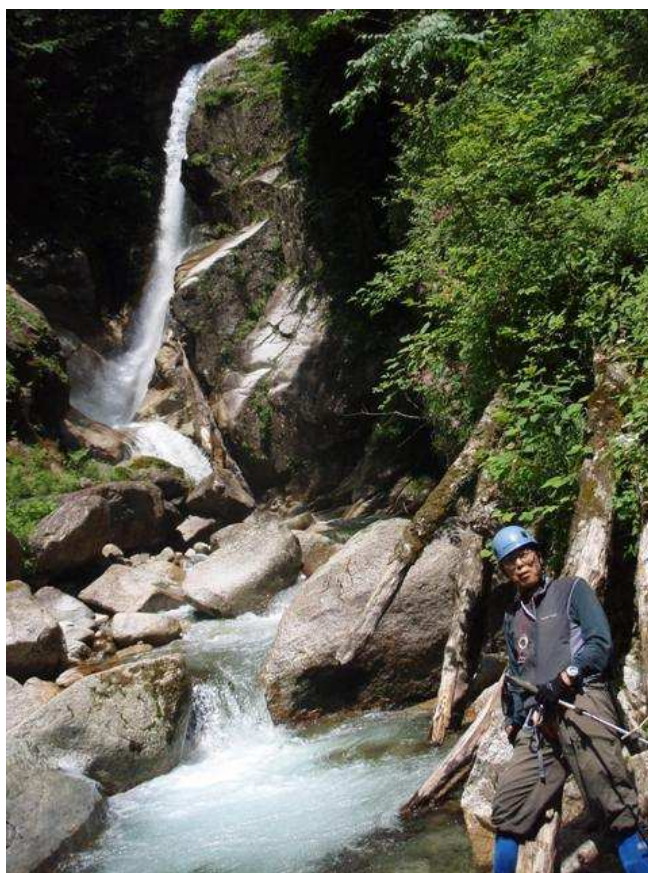


写真-8 大西ノ滝・下の滝

14時40分頃に大西ノ滝の上部の河原に降り立つことができた。2段の砂防ダムを出発して、7時間も経過している。大西ノ滝を越えると流れの緩い河原を辿ることが出来る〔写真-10〕。小さな沢が両サイドから合流するが、北の方向を確認しながら進んだ。高度1800mの位置に、



写真-9 大西ノ滝・上の滝

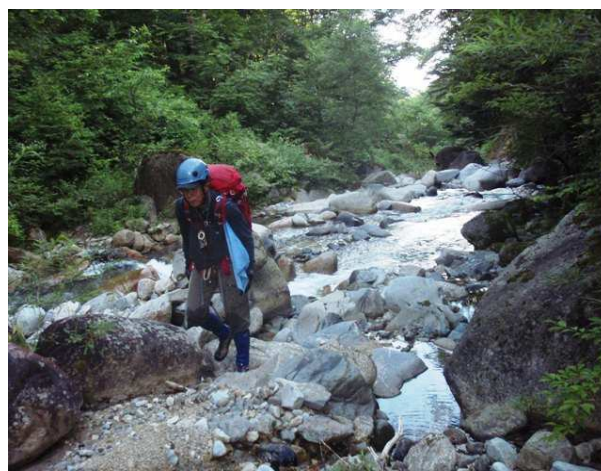


写真-10 大西ノ滝の上流河原

安平路山から南に伸びる尾根に向かう沢と白ビン山に向かう沢が分かれる二股があり、ここでビバークすることにした。増永・井上パーティーは、二日目に安平路山から南に伸びる尾根を辿って安平路山に登頂し、奥念丈岳に向かう途中に当時あったが、今はない避難小屋に泊っている。我々は、ザイルを張り渡して、それにフライシートを架けた簡易テントで寝た。降雨の心配はなかった。

8月5日(日):晴

テントサイト発(5:28)⇒(8:49)稜線縦走路に合流⇒(9:55)白ビン山(2265m)⇒(11:38)摺古木山(12:04)⇒(13:18)避難小屋(13:40)⇒(15:00)林道ゲート

5時半に遡行を再開する。幸いにも本日も晴天である。沢の本流は、標高1800のテントサイトで二股に分かれているが、我々は水量の多い左俣を進む。これを進むと安平路山と白ビン山の



写真-11 巨礫で埋まる沢を遡る

中間の稜線に達することになる。また、その付近には安平路山避難小屋がある筈である。どこに到着するかを楽しみに最後の頑張りで進む。当初巨礫でうまってその隙間を水が流れていた沢は、徐々に、水量が減り、礫岩が落ち葉に代わった浅い沢に変化してゆく[写真-11]。写真-12 に松川・西俣川の源頭の状況を示す。菅さんたちを飲み込んだ沢は、ここまで来ると、斜面の単なる「ひだ」のひとつでしかない。ここは白ビソ山に向かう途中の斜面であった。水の流れか切れた斜面で、やっと沢歩きの装備を脱ぐ。ここから安平路避難小屋に向けてトラバース気味に移動すると、程なく山道に遭遇することができた。8時49分、遡行の完了である。

ここから縦走路を辿って、白ビソ山、摺古木山を經由して、大平宿に下山することになる。1時間程で白ビソ山の頂上に着く。山道は、ササに埋め尽くされて隠れてしまっており、白ビソ山の頂上もその標識がなければ、気付かないままであろう。この稜線はササの繁殖が旺盛なことで有名であり、ササに隠れた倒木や段差などの障害物に注意しなければならないルートでもある。白ビソ山の下りで、夫婦と思われる二人連れが、軽装でササの中を登ってきた。安平路山まで日帰りで往復するつもりであると言っていた。時間的には難しそうである。

摺古木山には、11時38分に着いた。ここ頂上では携帯電話が使用できる。予約しておいたタクシー会社に、東沢林道のゲートまで迎えに来てくれるよう依頼する。約束の待ち合わせ時間は15時と



写真-12 西俣川の源頭の状況



写真-13 白ビソ山頂上にて



写真-14 山道を埋め尽くすササ



写真-15 摺古木山頂上にて

し、12時に頂上を出発した。

摺古木山からの下りでは、絨毯のように斜面を埋め尽くしたササの群落を眺めることができる。13時18分に林道終点にある避難小屋に着いた。立ち入り禁止のはずであるが、ここには、車が2台駐車していた。先ほどの夫婦の車であろう。ここから延々、待ち合わせの林道ゲートまで林道を歩かねばならない。先行した和田さんに追いつけず、やっとの思いで林道ゲートに着いたのは丁度約束の15時であった。ここから、大平宿、大平街道を經由して、飯田市内の日帰り温泉「砂払温泉」に向かった。

幸いにも、好天に恵まれた慰霊登山となった。ササ藪に埋もれてしまった山道から、この山城への入山者が非常に少ないことが伺える。松川・西俣川の遡行では、合流する枝沢が多く、現在位置の確認に手間取った。最初に迷い込んだ沢は、小西ノ滝に向かう沢で、途中で砂防ダムが幾つも建設されていたが、大西ノ滝のある沢には砂防用の構築物はなく、自然の沢が残されていた。通過するのに精一杯で、正確な溪相を知る余裕はなかったが、久し振りに充実した沢登りを楽しむことができた。

〔記 青景〕